

## 海外シリーズ②③

# 海外教育協力の一翼を担って —中東・アフリカ・アセアンの8年間—

大野 正 雄

古い話で恐縮だが30年前のでき事から始めたい。私の海外教育協力の活動がその年から始ったからである。1968年3月イランの首都テヘランに降り立った。初めての海外それも単独行である。武者震いにも似た緊張を感じた。

私にとってイランは全く未知の国であり、イスラムについては全く無知であった。とはいえ全く不安な気持はなかった。むしろ期待感でいっぱいであった。

縁あって7年後再びテヘラン住いとなり、更にトルコ、パキスタンの駐在が加わり、イスラムの“専門家”といわれるようになってしまった。そして、その経歴が現職に連結したのである。

### 1. 理科教育専門家時代

一途上国の理科教育振興のために—

#### ☆理科教育専門家として講習指導

1966(昭41)年、文部省はアジア・アフリカ理科教育協力というプロジェクトを始めた。いわゆるODAの技術協力の一環である。

300万円(当時の予算)の理科実験機器を供与し、実験中心の理科学習指導法を教授するのが仕事の内容であった。私の場合は化学実験中心に化学教育のあり方を講ずることであった。私の最初の予定地はタンザニアであった。それがいつの間にかイランに変更になっていた。(その変更事情は後述する)

技術協力というと“コロンボ・プラン”に触れなければならない。

1950年、現スリランカの科ロンボで開かれた英

連邦外相会議で二国間援助について議決された。当初は英連邦諸国間の援助問題であったが、アメリカ・日本先進6か国が参加して世界的規模に拡大された。理科教育協力もそのプランに基いた二国間援助であったのだ。私のパスポートの職業欄は“Expert On Science Education Under The Colombo Plan”であった。

赴任先はテヘラン教員養成大学(イラン名:ダニッシュ・サラ・アリ)で、中等理科教員の再教育を担当することであった。

実験講習会は前期、後期の2回に分けて実施した。前期は週3回、1回は2時間ずつで26回、2か月にまたがった。あやしい手つきであった彼等も終わり頃は立派な化学教師振りであった。

後期は連日で3週間の集中講習。1回は3時間で18回であった。幸いユネスコから派遣されて来た教授と2分割して9回ずつになった。彼は講義中心で、私は実験中心であった。



前期講習会参加の先生たち。中央白衣が筆者。  
右端中腰の者が助手を勤めたB教諭。(1968. 5)

- ・国際協力事業団青年海外協力隊事務局技術顧問。
- ・元理科教育専門家(コロンボ・プラン専門家)
- ・元イラン、トルコ、パキスタンの日本人学校校長(昭和26年応用化学科卒業・新制1回)

断然私の方が評判がよかった。第1の理由は実験中心であったこと。第2はなんと言葉であった。ユネスコ教授はアメリカ人で、彼の英語はさっぱりわからないというのだ。イラン人にとって英語

は外国語である。その点、私の英語は「ゆっくりで、文体もやさしいのでよくわかる」というのである。苦笑ものであった。妙に気が楽になった。

#### ☆全国理科教員研究集会の特別講師となる。

教育省主催で行なわれる全国的大会である。その年はイラン東北部のマシャドで開かれた。一講座を持って欲しいと頼まれ引き受けた。

実験講習会の内容と関連させて、テーマを「物質概念の育成について」とした。「物質の特性」と「化合物学習での定比例の法則」に関する実験方法と結果を例示した。講習会参加者の顔をあちこちに見ることができた。彼等が実験で得たデータを使った。イラン人教師が出した実験データに価値があった。講義終了後何人も先生達が集って来た。「とてもよかった」「次の講習に参加したい」と握手を求めて来た。イラン人は率直である。

## 2. 海外日本人学校長時代

—いつの間にかイسلام専門家—

二度と来ることはなからうと、モノ好きで覚えたペルシア語が、7年後の1975年に役立つこととなった。テヘラン日本人学校長として赴任したのである。この日本人学校は先の理科教育専門家としてのテヘラン駐在時に開校した。中学校教員経験のあった私は、テヘラン校の先生達と仲よしになり、学校にもよく出かけた。そのような馴染みのある思い出深い学校に赴任できたことを喜んだ。

専門家時代の講習生とも再会できた。特にお世話になった助手のB教諭は教務主任になっていて、学校間交流に協力してくれた。近隣の現地校との交流があってこそ海外校らしい活動といえるであろう。そしてペルシア語会話とイランの歴史を学ぶ時間の一つにして“イラン学”として必修にしたのだ。また現地社会を学ぶ校外学習(フィールド・ワーク)を行なうようにした。

トルコのアンカラ日本人学校とパキスタンのイスラマバード日本人学校は新設校で初代の校長となった。教育方針はテヘラン校と同様現地理解教育の推進であった。現地の文化を知ることの楽しさを体験させる努力をしたのである。

日本人学校校長時代は、“化学”に無縁な時代であった。強いて探せば、中学生の理科の授業で“化学”を教えたことである。

#### ☆中東は銅製品が多いところ。銅鉱山は何処？

「古道具屋には昔の日用品が並んでいる。鍋、釜、皿、水差しなど殆ど銅であった。中東のどこかに大きな銅鉱山があるにちがいない。調べた結果、キプロス島に銅の鉱山があることがわかった。それもB.C 3000年頃に銅をとり出す技術(精錬)があったという。驚くべきことである」と。

「銅の元素記号Cuはラテン名のCuprumから採った記号である。Cuprumは“キプロスの金属”を意味しているとのことである」と。

元素記号授業のときこのことを話してやった。生徒は興味をもって聞いてくれた。更に、科学史の中での中東イسلام圏の果たした役割を話してやった。「錬金術といわれる“物質変化”を研究して“金”を得たいという活動は、“化学”の発展に貢献した。ケミストリーはアラビア語のアル・ケミーから来ている。アルコール、アルカリ、アルデヒドなどアラビア語なのだ」と。

## 3. 青年海外協力隊技術顧問時代

—青年と共に理科教育協力—

青年海外協力隊との出会いも30年前にさか上ることになる。理科教育専門家時代とつながる。コロボ・プラン専門家の派遣のエージェントは海外技術協力事業団(OTCA)であった。協力隊の派遣も同じであった。この事業団は現在の国際協力事業団(JICA)の前身である。“専門家時代”の項に記したように私の最初の派遣予定国はタンザニアであった。ところが、「受け入れ体制整わず」でタンザニアは辞退してきた。代わって出てきたのがイランであったのだ。帰国してその辞退の理由がわかった。

私がイランに行った同じ年1968年の12月に13人、3か月遅れて更に6人、次の年度に1人計20人の青年理科教師がタンザニアのセカンダリスクールに赴任したのであった。つまり、タンザニア政府が欲しがっていたのは指導者としての専門家ではなく、生徒を教える教師のマンパワーそのものが欲しかったのである。

今年は協力隊が始まって32年目、理数科教師隊員の派遣がはじまって29年目になる。現在アフリカには、タンザニアをはじめ、ケニア、ガーナ、ザンビア、マラウイの英語圏5か国に106人活動している。その他の地域としては、東南アジア27人、オセアニア22人、中南米20人、で総計175人で最大職種になっている。